

氏名	田中 雄祐
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5999 号
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)

学位論文題目  
メルロ＝ポンティの政治哲学  
——共存と変革——

学位論文審査委員	教授 竹島 あゆみ	教授 小田川 大典
	准教授 植村 玄輝	准教授 岡本 源太
	立命館大学教授 加國 尚志	

## 学位論文内容の要旨

本論文は、フランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908–1961) の政治的転向——1940 年代におけるマルクス主義へのコミットから 1950 年代中盤以降の「新しい自由主義 (nouveau libéralisme)」へ——に関する新しい解釈を提示することを目的とする。著者の田中氏によれば、メルロ＝ポンティの政治哲学は、彼の哲学の全体のなかに位置づけて解釈されるべきものであり、そのとき、問題となっている政治上の立場変更は、主著『知覚の現象学』(1945 年)で提示された社会理論が抱える難点を制度化論によって克服した結果として姿を表すのである。本論文は全 4 章の構成を持ち、第 1–2 章が『知覚の現象学』の社会理論と転向前のマルクス主義的見解を、第 3–4 章が制度化論と新しい自由主義をそれぞれ主題としている。以下では、各章の概要を示す。

第 1 章『知覚の現象学』における社会理論では、社会理論を論じた著作とは通常みなされていない『知覚の現象学』において、メルロ＝ポンティが実際には社会理論を提示しており、この理論が (a) 知覚論と身体論を下敷きとした社会的規範や共存に関する理論と (b) 表現論を下敷きとした社会変動論・革命論からなることが論じられる。田中氏は、(a) 特権的な知覚と身体的技能、そして私と他者による異なるパースペクティヴからの世界の分有に関する『知覚の現象学』の現象学的な議論が、社会における私たちの共存に関する理論としても展開されていることを指摘する。さらに田中氏は (b) 主に言語論・芸術論の文脈にある『知覚の現象学』の表現論の特徴が、同書

で素描される社会変動論（革命論）のなかにも読み取られることを明らかにする。

第2章「政治と歴史」では、上のように再構成された『知覚の現象学』の社会理論が、1940年代のメルロ＝ポンティの政治的著作のなかで具体的にどのように用いられているのかが論じられる。田中氏によれば、「戦争は起こった」（1945年）における「楽天主義の哲学」批判が一貫して件の社会理論の観点から行われている一方で、『ヒューマニズムとテロル』（1947年）では、人間の共存という政治的問題を扱う際に、（表現論ではなく）マルクス主義的な歴史哲学に基づく社会変動論が採用されている。

第3章「制度化」では、メルロ＝ポンティがマルクス主義的な歴史哲学を放棄した過程が、1950年代の制度化論を通じて論じられる。田中氏によれば、『知覚の現象学』で提示された社会理論は、制度に関する議論の不在という問題点を抱えており、その結果、社会規範に関する理論と社会変動論を共通の地平で扱うことができなかった。田中氏は、以上のような事情が『ヒューマニズムとテロル』におけるマルクス主義的な歴史哲学の採用の背後にあるという見立てのもと、制度化に関するメルロ＝ポンティの議論がふたつの理論をひとつの動的な過程に関するものへとどうやって統合したのかを描き出す。

第4章「新しい自由主義」では、前章で概略を与えられたメルロ＝ポンティの1950年代の社会理論が同時期の政治哲学に具体的にどのような変化をもたらしたのかが、1949年の論考「マキャベリ覚え書」を手掛かりとして追跡される。田中氏によれば、この時期のメルロ＝ポンティは、人間の共存という政治的問題を権力の正統性という観点から論じており、そこで政治家に求められる資質として「コミュニケーション」と「歴史の兆候を読み取る能力」を挙げるのだが、こうした主張は、制度化論における芸術家に関する議論を下敷きにしたものなのである。さらに田中氏は、メルロ＝ポンティのこうした見解に基づいて、議会における熟慮を重視する「新しい自由主義」がどのようにして保持されるに至ったのかを明らかにする。

結論部では、本論文の簡潔な要約に続いて、今後に残された課題が2点挙げられる。第一に、メルロ＝ポンティの後期哲学が（どのような）政治哲学的含意を持つのかという問題は、本論文では取り上げられなかった。そして第二に、メルロ＝ポンティの政治哲学が彼の学生であるクロード・ルフォールやコルネリウス・カストリアディス——彼らは現代フランスの政治哲学における一大潮流の源流に位置する——にどのような影響を与えたかという問題も、本論文では取り上げられなかった。これらの課題への取り組みの持つ意義を簡潔に指摘することでもって、本論文は締めくくられる。

## 学位論文審査結果の要旨

本論文の独自の貢献は以下の4点である（なお、田中氏はこれらの成果を先行研究のなかに位置づけることにも成功している）。

(1) 田中氏は、メルロ＝ポンティの哲学と彼の社会理論・政治理論との関係を扱うにあたって、『ヒューマニズムとテロル』（1947年）と『弁証法の冒険』（1955年）を主要なテキストとしてい

る。このことは、これらの著作が（同時代の政治的・社会的出来事に深く関わるゆえに）近年のメルロ＝ポンティ研究であまり言及されなくなっている現状に鑑みると、それだけで本論文の独自性を示している。そして田中氏は、これらの著作にもとづいて、『知覚の現象学』以降のメルロ＝ポンティの問題関心のひとつである、社会の問題への取り組みを再構成することに成功している。

(2) 田中氏は、メルロ＝ポンティの哲学的見解の発展が、歴史や政治に関する見解の変化と連動していることを示すための基軸として、『知覚の現象学』の議論から社会規範論と社会変動論を再構成している。『知覚の現象学』のこうした解釈は独創的なものであり、また、それを手掛かりにしてメルロ＝ポンティの思想の発展に一貫した解釈を与えようとする試みは、今後のメルロ＝ポンティ研究に一石を投じるものとして評価できる。

(3) 田中氏は、歴史に関するメルロ＝ポンティの見解の変化を、ゲシュタルトとしての歴史の話から制度化としての歴史へというかたちで説得的に取り出している。こうした成果はこれまでのメルロ＝ポンティ研究にはみられないものであり、また、制度化としての歴史を論じる際に真理の事後性に関する議論に焦点を当てた点も、議論の進め方としてオリジナリティがある。

(4) 田中氏は、本論文で再構成されたメルロ＝ポンティの哲学・政治思想とその発展を手掛かりにして研究の範囲を拡大し、ルフォールやカストリアディスの政治思想を論じることを、今後の課題としている。このような発展的研究に安定した基礎を与える本論文は、ルフォールがその重要性に比して日本のアカデミズムで十分に研究されていないという事情をふまえると、日本のフランス政治哲学研究に重要な貢献をもたらすための第一歩として、長期的な観点からも評価できる。

またここで、本論文の主要な部分が、日本哲学会大会および日本現象学会大会での学会報告（ともに審査あり）や、関西倫理学会『倫理学研究』（査読あり）および『岡山大学社会文化科学研究科紀要』への投稿論文というかたちで公表されており、すでに専門家による吟味を経ていることも付け加えておく。

本論文にはいくつかの課題もある。第一に、本論文の叙述の形式には改善の余地があり、立ち入った論証によって挙げられた成果の重要性を、各章の概要やまとめのなかでもっと強調すべきではないかという指摘がなされた。第二に、1950年代のメルロ＝ポンティが支持する民主制や代議制がどのような内実を持つかについて、本論文が十分に議論を尽くしたとは言い難い。また、歴史に関するメルロ＝ポンティの見解に断絶ではなく連続性を見出すという別解釈を退けるための議論が、本論文には不足している。

しかし、これらの課題は本論文の積極的な評価を覆すものではない。また田中氏は、これらの課題に今度どのように取り組むのかについて、審査会の場で明確な見通しを示した。以上の点に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士の学位にふさわしいものと判断した。